

II 発掘調査の概要

1 浦田遺跡（7次調査）

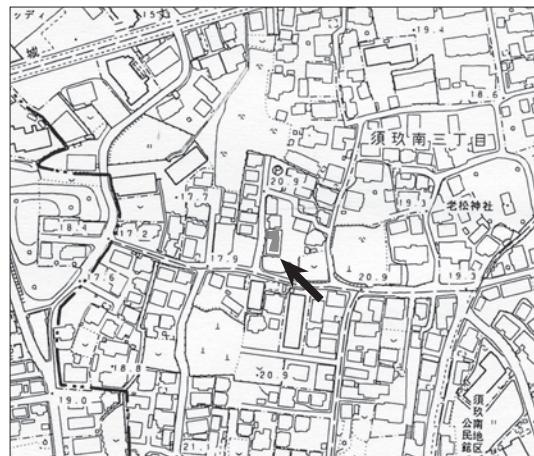
所在地 春日市須玖南3丁目 115・117番

調査面積 87m²

調査期間 2013年5月13日～6月5日

浦田遺跡は春日丘陵の西側から福岡市にかけて広がる台地上に位置する。当遺跡ではすでに6次にわたる調査が行われており、弥生時代～中世にかけての集落や墓地が確認されている。ただし、大規模な調査は、ほとんど行われていないため、今後の調査によっては、新たな発見が期待される遺跡でもある。

また、今回調査した7次調査地点は浦田遺跡の南端部であり、道路を挟んだ南側には古野ノ上遺跡が存在する。ただし、古野ノ上遺跡についても実態がほとんど分かっていないため、今後の調査によっては浦田遺跡と同一の遺跡になる可能性も考えられる。



1. 調査地の位置 (1/5000)



2. 調査区全景 (東から)

7次調査は宅地造成に伴う緊急発掘調査であり、対象地の内の遺跡が確認され、開発により破壊を受ける東部を中心に調査区を設定した。

遺構・遺物

対象地は、すでに宅地として利用されており、周辺部についても地形が改変され畑として利用されていた。このため攪乱を受けた部分が多くたが、弥生時代の竪穴住居跡1軒、掘立柱建物跡1棟、土坑1基、中世の溝1条と多数のピットを確認した。以下では、主なものについて述べる。なお、遺構の検出面は標高20m前後である。

弥生時代の竪穴住居跡は調査区南部で検出し、南・西部を削平されていた。土器や石塊が出土し、弥生時代終末期のものと分かった。掘立柱建物跡は住居跡下で検出したものである。柱穴の規模や深さなどから、3つのピットを掘立柱建物の柱穴と判断したが、調査区外まで延びるため全体像は不明である。周辺の状況から考えて弥生時代後期のものであろうか。中世の溝は調査区北端部で検出し、東西方向に延びる。北壁は調査区外になるため、溝幅は明らかではなく、壁の立ち上がりから推測すれば1.2m前後となる。深さは1.2mである。壁の立ち上がりが急であることや土層観察などからは水路とは考えられないことから、何らかの施設の区画溝の可能性がある。ピットは出土遺物が少ないが、殆どは弥生時代のものと思われる。大型のものが含まれるために上述した以外にも掘立柱建物跡の存在が推測できるが、調査区内では明らかにすることはできなかった。

小 結

浦田遺跡では、小規模な調査しか行われておらず、遺跡の性格については、ようやく近年明らかになってきている。前述したように当遺跡の南側には古野ノ上遺跡があり、両遺跡の関係を明らかにしていく必要がある。また、さらに南側の福岡市弥永原遺跡では副葬品を伴う弥生時代後期の墳墓群やガラス勾玉鋳型、北側の御陵遺跡、野藤遺跡では複数の青銅器鋳造関連遺物や前方後円墳も確認されているため、今後の調査に期待される点が多い。

(井上)



3. 1号住居跡（南から）



4. 1号溝南北土層（東から）



5. 遺構配置図 (1/80)